

吹田市立第一中学校 三年

ふにゃふにゃの文字

綾田 暦

私の妹は自閉症だ。滑舌があまりよくなくこだわりも強い。妹は私と同じ小学校に通っていて、小学校の支援学級に所属していた。滑舌が悪くて上手に話せないことも、ずっと一緒に暮らしている内に聞き取ることも慣れてくるので、妹が何を言いたいのか概ね理解することができた。周りの人たちも妹のことを温かく受け入れてくれていたので、自閉症の妹がいるからという理由で私の日常生活に支障が出ることはなかった。

私は中学生になり、妹は小学五年生に進級した。私の通う中学校は二つの小学校からの児童が進学してくるので中学生になって新しい友達とたくさん出会った。

ある違う小学校の友達と話しているときだった。会話が弾み、自分たちの家族の話になった。話しているうちにその友達にも私の妹と同一年の妹がいることが分かった。「○の妹と私の妹は同じタイミングでこの中学校に入学するね。」友達にそう言われて私は少し戸惑った。その時には

もう、私の妹は私の通う中学校には進学せずに支援中学校に進学することが決まっていたからだ。「実は、私の妹はこの中学校には来ないの。支援中学校に行くの。」と続きを言うべきなのか私は迷った。なぜかそのとき、私の妹は障がいを持っているということがバレたくないという気持ちが湧いたからだ。結局、私は笑ってその話を流してしまっただ。

私の妹は障がいを持っている。このことは恥ずかしいことなのか。小学生の時はみんな妹のことを暗黙の了解のように分かっていてくれたが、中学生になって、新しい友達はこのことをどう思うのだろう。そう思うと私は少し怖くなった。それから私は妹のことを人前では話さないようにと意識するようになってしまった。しかし、妹と二人で遊んだり、おつかいに行ったりと私の妹への接し方は今までと変わらなかった。

そのまま月日は流れ、妹は小学校の卒業式を迎えた。妹

と一緒に卒業式から帰ってきた母から一通の手紙を渡された。その手紙に書かれていたのは妹の書いたふにゃふにゃの文字だった。妹が書いたその手紙には、ほとんど最後の行まで母でもなく、父でもなく、私に宛てられた内容だった。そこには妹から私に向けての感謝の気持ちが生懸命つづられていた。何度も書き直したのであろう、消された文字の跡がまだ残っていた。私は一文字一文字、妹が書いた字にじっくりと目を通していった。その手紙を読み終わったとき、私はなぜ人と違う個性があるからという理由だけで妹のことを恥ずかしいだなんて感じたのだろうか、と思った。その瞬間、私の目から涙が溢れ出た。いろいろな感情が混ざった涙だった。

私の妹は人と違う個性を持っている。また、私の妹は人より何百倍も大きな優しさや人を思いやる気持ちを持っている。そんな妹を私は今、恥ずかしいだなんて一ミリも思っていない。私は妹のことをとても誇らしく思うし、そんな妹を持っている私はとても幸せ者だ。

京都市立二条中学校 三年

生きる理由

川江 鳳太

僕はあるきっかけで変わりました。それは、岩本心さんという人の講演会でした。まず岩本心さんのことを紹介させてください。岩本心さんは、現在大学四回生です。もうすでに女性一人で世界一周を達成されました。留学もされていて、世界の恵まれない子供の現状を把握し、ボランティア活動もされました。そして、世界を周っていく中で本当の豊かさとは何かと疑問を持ち、国連の演説で有名になった「世界で最も貧しい大統領」と言われた元ウルグアイ大統領ホセ・ムヒカさんにアポなしで会いに行き、自らインタビューをすることに成功しました。インタビューの中から、「本当の豊かさとは『生きる理由』を持ち続ける人生のことだ」とムヒカ元大統領の言葉を僕たちに教えてくれました。僕はもう岩本さんの行動力と決断力に驚き、圧倒されっぱなしでした。

岩本さんの講演を聞いて、世界には家がなく、路上に住んでいて、学校に行けない、遊ぶ時間がない、金銭もない、

支えてくれる家族もない子供が世界にはたくさんいることを知りました。そんな厳しい環境の中、それでも懸命に笑顔で生きている。僕はそれが一番驚きました。そしてその子供たちに生きる理由をなんとか見つけさせようとする心さんの姿に感動しました。

皆さんは「生きる理由」を考えたことがありますか？僕はあまり深く考えたことはありませんでした。でも、どうして自分は難聴で生まれてきたのかと考えたことはあります。少なくとも難聴の自分をイイと思った事はないです。

自分は今まで、人前に出たくなかったし、暗い自分だったと思います。

そして自分にとっての幸せとは、家族や友達が元気で暮らしていれば、それでいいと思っていました。でも、そんな考え方でいいのか。じっくり考えました。一所懸命に生きる子供たちと、その子供たちのために『より豊かに生き

る方法』を考える心さんのようになりたい。

自分にとつての豊かな生き方とは、周りの人を思いやっ
て、困っている人を助けることだと確信しました。自分は
難聴で、他人よりハンデがあるかもしれない。でも世界
を見てみれば、様々な過酷な環境の中で、懸命に生きてい
る、そんな人がたくさんいることに気づけたから、そう考
えてみたら自分の難聴なんて、小っちゃく見えてきまし
た。僕は自分の考え方が甘いと気づきました。正直に言え
ば、難聴であることは、この先自分を苦しめると思います。
でも諦めずに勇気を出せば必ず心さんのように自分の知り
たいことや、やりたいことを夢として実現すると思えまし
た。

だから今、自分は今できることをがんばっています。例
えば、カナリー委員に立候補しました。

さらに、カナリー委員長に立候補しました。カナリー委
員長には三人の立候補者がいたけれど、その時に心さんに
教えてもらい、自分がこれまで思ってきたことを皆に訴え
ました。そして委員長を任してもらえました。

自分の思いがうまく伝わった気がしました。

僕は今までの自分にさよならします。これからは、「難
聴だから○○」とあきらめることはやめます。出来ない
言いたくありません。「難聴でも出来る自分」を信じて世
界に飛び出していきたいと思います。

高松市立高松第一中学校 二年

兄ちゃんへ

川崎 由衣

私は兄ちゃんが大好きです。私の衣服やエプロンにアイロンをかけてくれたり、洗濯もしてくれたりします。家事を手伝ってくれるおかげで家族のみんなが助かっており、感謝しています。家族だけではありません。誰に対しても優しく接する兄ちゃんは、私たち家族にとって自慢の兄です。兄ちゃんと過ごす時間はとても楽しく感じます。でも、私の兄ちゃんには、自閉症という障がいがあります。

「なんでみんなのお兄ちゃんと少しちがうんやろ？」私が小さい頃抱いていた小さな疑問です。一人でふらふら歩き回ったり、独り言が多かったり、当時の私にとって、兄は少々厄介で迷惑な存在でもありました。しかし、私の家族は、兄を通して障がいがある方と接する機会が多く、様々な出会いの中で、その考えは徐々に変わってきました。

Aさんは、相手の意見を落ち着いて聴き、自分の意見はハキハキと言う、とても爽やかな方です。今、彼女は仕事に就いており、自立しています。彼女は普段から周囲に気

を配り、私にも優しく接してくれます。母から「あの子にはダウン症という障がいがあるんやで」という言葉を聞くまで、その事実を知りませんでした。

Bさんは、重度の自閉症と知的障がいがある女性です。彼女は一人で考えて行動することがほとんどできません。しかし、障がいのある人たちが参加するトランポリンの大会では、なんと賞を取ることができました。また、エレクトーン大会にも出場しています。Bさんのように、障がいがあっても、こんなに優れた技能をもつ人はたくさんいます。できることはいっぱいあるんです。

しかし、健常者の中には障がい者を見て「劣っている」とする、目には見えない風潮があるようです。AさんやBさんと接していると、それが不思議でなりません。健常者であっても走るのが苦手な人はいます。コミュニケーションを取るのが苦手な人だっただくさんいます。人には長所があつて短所も存在します。人とは少し違う得意なことや

不得意なこと、それらをひっくり返して個性と呼ぶならば、障がい者にとつてのハンディキャップもまた、個性に他ならないと思います。健常者の言う「劣っている」という目には見えない風潮は、「何もできない」という偏見を生み、例えば、就職時において採用されないとつた差別をたくさんの人たちが受けています。私と兄ちゃんが歩む未来は、そうであつてはならないんです。誰もが平等に、互いを尊敬しあい、明るく楽しく過ごせる、そんな社会を、兄ちゃんや私のなかまとともに創つていきたいと思いません。

兄ちゃんは今日もまた、嫌な顔ひとつせずに、頼まれたことを「いいよ」とふたつ返事で引き受けて、せつせと家事をこなします。

兄ちゃんは褒め上手。知らない振りして、私のことをしっかり見ていてくれます。私が気付かない私の良さをしっかりと指摘してくれます。いろいろなことも教えてくれます。

私の知らない学校の事、私の知らないゲームの話。兄ちゃんは私の世界を広げてくれます。私とけんかをして、私の方が悪いのに、兄ちゃんの方から「ごめん」と謝つてくれます。兄ちゃんは嘘がつけない人だから、私に「ここがダメ」って言うことがあつて、時々私は「ムッ」とするところもあるけれど、その素直なところが兄ちゃんが一番の長所だと思っています。いつまでも変わらぬ優しい兄ちゃん。

ん。笑った顔が誰よりも素敵なお兄ちゃん。心配性で、いつも私のことを気にかけてくれる優しいお兄ちゃん。差別なんかに負けるなよ。私がついてるからね。

兄ちゃん、大スキだよ。

みやざき 宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校 二年

「眼鏡」を手放して

きたむら 北村 優羽

シヨッピングモールで独特な動きをしている発達障がいのある人を見たとき。テレビで視覚障がい、聴覚障がいのある人を見たとき。私はいつも、「かわいそう」と感じていた。でもその考えは間違っていた。それは「障がいⅡかわいそう」という私が自分で作りあげた「眼鏡」をかけていたことで生まれた、ゆがんだ考えだと気がついたのは、聴覚支援センターの人と出会ってからだだった。

私は小学五年生の夏休みに「目の不自由な人の生活」という自由研究で県の視覚支援センターを訪れた。聴覚支援センターはその上の階にあり、私は階を間違って足を踏み入れてしまっただけだった。しかし、職員の人突然訪れた私に、

「取材が終わったらここにもおいで。」

と声をかけてくださった。初めて訪れたこの施設では、耳の不自由な人が二人働いていて、手話を使ってコミュニケーションをとる場面が多くみられた。パソコンのテレビ

通話を使って他の施設の人と連絡をしていることもあった。手話を使う職員の人たちは表情豊かだった。手話は表情も大切だからだ。「嬉しい。」と言うときは、体の前で手を上下に動かして幸せそうに笑う。「嫌い。」というときはあごの下で人差し指と親指を開きながら眉間にしわを寄せる。会話の中で流れるように変化していく表情が素敵だった。きっと手話を使う人は、たくさん表情であふれているに違いない。そう思うと自然に笑顔になった。

聴覚障がいのある職員の人と、通訳ができる職員の人に手話を教えてもらっていたが、一度仕事の都合で通訳をしてくださった職員の人が席を外してしまった。通訳なしだと、会話にとても時間がかかったが、教えてもらった手話と、ジェスチャー、そして表情で必死に会話をした。思いつきり口角を上げた「笑顔」、眉間にしわを寄せた「困り顔」、目尻を下げ口をへの字に曲げた「泣き顔」。自分の中から取り出したさまざまな表情とともに、一つ一つの指

の動きを紡いでいった。そうしてつないでいく会話には思いがあり、重みがあり、あたたかさがあつた。うまくつながった瞬間は思わず笑顔がこぼれた。私はもう「眼鏡」を手放していた。

「障がい者」。目の不自由な人、耳が不自由な人、体の一部がない人、発達障害のある人。その一人一人を、私たちは「障がい者」かわいそう」という「眼鏡」を通してしか見ていないのではないだろうか。聴覚支援センターで聴覚障害のある職員の人にはじめて会ったときも、私は眼鏡を通してその人を見ていた。その人自身を見ようともせず、勝手に、「かわいそう」だと決めつけていた。しかし「眼鏡」をとった先で私が見たのは、思うようにコミュニケーションがとれず「かわいそう」な人ではなく、手話で会話を楽しみ、いきいきとした表情を浮かべる人だった。

聴覚支援センターで働いていた人たちは誰一人として「障がい者」かわいそう」という考えをもっていなかった。日頃から聴覚障がいのある人と仕事をし、コミュニケーションをとっているからこそ、「口で話せないのなら、手話を使えばいい。」という柔軟な考えがある。障害があることをすべてマイナスに扱えていない。「眼鏡」をとるために大切なのはこういう考え方なのかもしれない。

ショッピングモールで独特な動きをしている発達障がいのある人を見たとき。テレビで視覚障がい、聴覚障がいの

ある人を見たとき。多くの人は「眼鏡」ごしにそれを見て、「かわいそう」としか考えないだろう。でも一度その「眼鏡」を手放してみてもいい。それが間違いだと思いがつくはずだ。障がいがあることは決してかわいそうなことではない。「眼鏡」を手放して見たあのあたたかい笑顔が、私にとつてなよりの証拠だ。

静岡市立しずおか蘆科わらしな中学校 一年

あの一言をかけるため

やまうち
山内 萌夏
もえな

それは、私がどんな人間なのか、一瞬でわからせてくれるような出来事だった。私は、家族と街に出かけていた。買い物はたのしくて、とてもワクワクしていた。

私は、家族と別れ、別行動になった。行きたかった店に行くのがとてもたのしみで、足取りも軽かった。その店までの道を歩いていると、私の前の方にいた一人のおばあさんに目がいった。車いすにのっている人だった。そのおばあさんを見つけた直後、おばあさんがのっている車いすが、道の段差にはまってしまった。おばあさんは、一人で不安そうに困っている様子だった。その時私は、学校で、障害について勉強していたことを思い出した。だから、一人ではできないことがあったり、困った時、頼れる人がいなくて、どうにもできないことがあったりするなど、車いすの大変さや、不安さは、分かっていた。「助けないといけない。」とそう思ったけれど、私の体は、そこを動こうとしなかった。「まず、声をかけたとして、そこからどう

したらいいんだろう。」とか「私一人で、何とかできるのかな。」などと色々な事が頭をよぎる。回りに、家族も知人も頼れる人がいなくて、自分がやるしかないと思っいても、行動に移せなかった。自分はこんなでいいのかと、こわくなる。「きつと父や母ならすぐ助けられるんだろうな。」や「どうすればいいのかわからないし、知らないふりでもしちゃおうかな。」と、自分の汚いところが、どんな見えてくる。つくづく自分が、いやになる。

私が、そんな事を考えていると、高校生くらいの男の人が、おばあさんに向けより、「大丈夫ですか？」と声をかけていた。たった一言だったけれど、とても優しく、思いやりのこもった一言だった。車いすのおばあさんは、とても安心したような表情を、うかべていた。おばあさんは、あの一言に救われたのだ。

私は、あの人のようにできなかったこと、おばあさんよりも自分を優先しようとしたこと。とても後悔した。そん

な自分がくやしかった。

行動とは、一つの動きで、人を喜ばせることも、悲しませることもできるものだ。あの時私は、人を悲しませるような行動をした。困っている人よりも、自分を優先し、思いやりのない、あつてはならない行動をした。あの時のことを、私は一生忘れない。いや、忘れたくても、忘れられないのだろう。もう、これ以上、後悔しないように、私は私に出来ることを精一杯やろうとちかった。私のこの一つの行動で、一人でも多くの人を笑顔にするために。